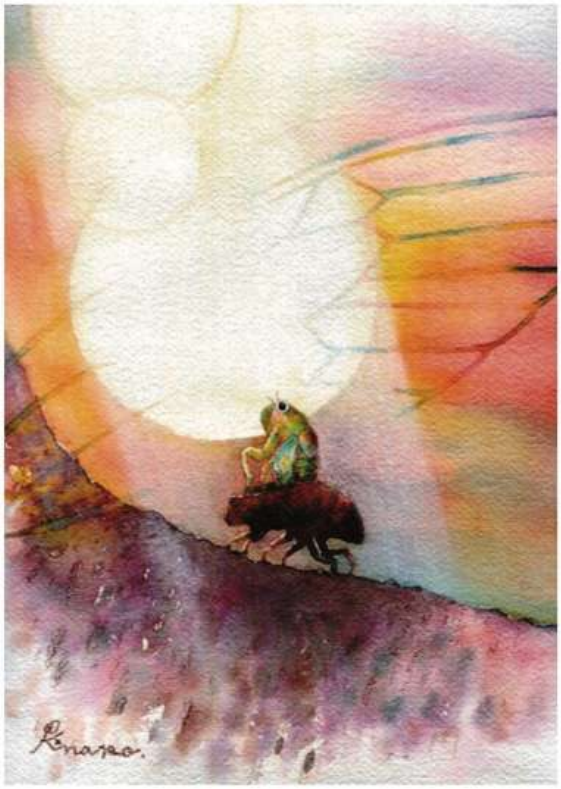
天使のはしご

文・小原麻由美
絵・小島加奈子

「僕はまだ、生きていたいんだ」
薄明の空に、必死のつぶやきが響きます。
それは、大きな桜の木にしがみついている、一匹のセミの叫びでした。
セミは羽化が始まって、明日には一週間が過ぎようとしていました。殻を脱ぎ捨てようとしないので、思うように動くことができず食べ物も自由にとることができず、今日まで生きながらえてきたのです。
「なんて姿をしているの?」
天から声が聞こえました。
たなびく雲の隙間から、こぼれるように光がさしこんでいます。セミは声がする方向へ顔を上げました。
「きみは、誰?」
「私は神様の使い……天使よ」
「神様なんていない!」
間髪入れず、セミは叫びました。
「どうしてそんなことを言うの?」
「僕は土の中にいる間、僕らをもっと長生きさせてくれって神様に祈ったんだ! それなのに、殻を脱ぎ捨てた友達はすぐに死んでしまった……」
セミは、声を出すのがやっとでした。
「あなた、このままじゃ、大人のセミになれないわよ」
天使は、少し戸惑いながら言いました。
「僕は大人になんてならない!」
セミは、声を震わせました。
「長い長い時間をかけて、土の中でこんなに大きくなったんだから、あなたには美しい羽をたずさえた、成長した大人のセミになってほしいの」
天使は、穏やかに言いました。
「嫌だ! 僕はこの殻を脱ぎ捨てる気はないよ。このまま生きるんだ」
「生き物はね、生まれたら必ず死が訪れる。ずっと生きていることは不可能なの」
うつむいていたセミは、天使の言葉を聞いて顔だけを上げました。
「神様っていうのは、死なないんでしょ? 不老不死の泉の水を飲んで、ずっと生きていられるって聞いたよ」
セミの瞳は潤んでいました。
「私たちは死なないんじゃなくて、死ねないの」
天使は、ポツリとつぶやきました。
「死ねない?」
セミは体を横たえながら、かすれた低い声を上げました。
「私たちは不老不死の泉を飲んだときから、死にたくても死ねない病気になってしまったの」
天使は優しいまなざしでセミを見守りながら、静かに言いました。



空はいつのまにか、曙色に変わっていました。
雲間から光の矢が降りそそぎ、セミの体を神々しく照らしています。その光は幾重にも重なって段になり、はしごのように見えました。
「さあ、勇気を出して! 大人になった新しい姿を見せてちょうだい」
天使は自分の羽を一本一本抜いて柔らかいストールを作り、力尽きそうなセミの体にふうわりとかけました。
セミは残された力をふりしぼって、殻を脱ぎ捨てました。
「わあ! 何て軽いんだろう?」
セミはちょっとおどけて、生まれたての羽をピクピク動かしました。
「どう? 飛べそう?」
セミはまだ動かしたことのない羽を、上下に羽ばたかせてみました。
「もしかして、これが僕の新しい姿?」
セミは不安そうに羽を見つめながら、ほんの少しだけ跳ねて宙に浮いてみました。
「ここまで来られる?」
セミは懸命に羽を動かしながら、思い切って両足を地面から離しました。
「この光は天使のはしご。与えられた命を生き抜いたものだけが昇ることのできるはしごよ」
セミは最期の力をふりしぼって飛び立ち、天使のはしごの下までやってきました。はしごの一段目に足を乗せようとしてやめました。
「僕……あと少しだけ、この姿で頑張って生きてみたい!」
セミの体はもうボロボロでしたが、明日を見つめるその瞳は輝いていました。
「いってきます!」
セミはもう一度羽を動かし、天使のはしごのまわりを旋回しながら、気持ちよさそうに飛んでいきました。

(おわり)

=次回は8月16日に掲載

文 小原麻由美 1969年、名古屋市生まれ。保育士を経て児童文学作家に。代表作に「ありがとうの道」(PHP研究所)、「キュンすけのおくりもの」(三恵社)がある。

絵 小島加奈子 1969年、愛知県大府市生まれ。北海道由仁町在住。画家、イラストレーター。93年、愛知県立芸術大学大学院修了。北の自然と寄り添い暮らす。